

国道4号線七北田村分にも、同時に建てられたものがありました。昭和28年道路工事の際撤去されてしまいました。「距仙台元標壹里不 陸前国宮城郡七北田村 明治廿二年四月設宮城県」と刻んであったものです。

なお、昭和46年1月里程標を復元したとして某建築業者が建てた石標は、全くの虚構に成るもので、誤りを後世に伝えることとなります。「道標 南江戸六十九次日本橋迄九十三里奥州街道 北津軽四十五次三厩迄百七里二十二丁奥道中」とありますが、このような道標はかつて存在した事実がありません。形状も大町五丁目東一番丁東北角の氷人石標〔大内源太右衛門が明治15年12月5日建立〕の写真〔「仙台市史」第5巻P.443・「東一番丁物語」(柴田量平)P.141 所載〕を模したものであり、過去の絵図や写真と対照しても重大な虚妄というべきであります。〔この回答文〔文書による郷土的なレファレンス質問に対する回答事例〕2〕を公刊したのは昭和45年で、問題の石標が建てられたのは翌46年のことでした。〕

資料 仙台市史(明治41年刊)

仙台市統計一斑(明治34年)

仙台繁昌記(富田広重、大正5年)

竹に雀の囀るところ(佐々木豹五郎)

### 43. 天守台の昭忠碑について

問 天守台にある忠霊塔の建立年月日、その高さと上部の鷲の両翼の長さ、製作者は誰かを教えてください。

答 この塔の正しい名称は「昭忠碑」といい、昭忠会が明治34年7月起工、翌35年11月22日竣工式を挙行しています。昭忠会とは、佐賀の乱以後の旧第二師団管内〔宮城・福島・新潟・山形〕の軍人軍属戦病死者・国事殉難者の霊を祀るための招魂社<sup>(1)</sup>の建立と、あわせてこの昭忠碑の建碑を目的として、官民有志が時の宮城県知事小野田元熙を会長として、明治31年11月15日に結成された団体です。招魂社の方は明治35年5月起工、同37年8月落成しました。

昭忠碑は、ゴシック式花崗岩の石塔の頂上に青銅製の金鷄<sup>(3)</sup>を置き、石塔の前後に青銅のパネル<sup>(4)</sup>を装置したものです。御質問にある鷲とは、この鷄〔とび〕のことで、「明治天皇聖蹟志」(宮城県)・「宮城県史」・「目で見える仙台の歴史」・「宮城百年」(毎日新聞社)等の諸書でも、鷲と記してある箇所は誤りです。この塔の高さは67尺5寸、金鷄の翼の直径22尺です。〔記録のまま。mに換算しない〕。

鋳銅部の製作は、東京美術学校〔校長、正木直彦〕に委嘱しました。図案設計河辺正夫・金鷄原型沼田一雅・鋳銅桜岡三四郎・据付安田辰三郎の各助教授が担当完成しました。非常な重量物なので、当時の輸送事情からして、東京から現地までの運搬には容易ならぬ苦心が払われたようです。

建碑の工事請負者は、早川智寛の創業した早川組の事業を継承した橋本店〔橋本忠次郎〕、工事監督は<sup>(5)</sup>県内務部第二課長杉野茂吉<sup>(6)</sup>技師が総括し、専任の現場監督には技師鈴木金三が当りました。数々の明治建築を残した有名な建築家山添喜三郎も、<sup>(7)</sup>県技師としてこの建設に参画貢献しています。

注(1) 明治7年2月、江藤新平・島義男らが征韓反対の政府に不満を抱き、佐賀で挙兵した事件。

江藤・島等は敗れて極刑に処せられました。

注(2) 招魂社ができるまでは、戦死者・殉難者の慰霊祭は宮城野原や追廻等で、時々臨時に挙行するに過ぎなかった。招魂社は、昭和14年4月1日護国神社と改称、昭和21年宮城神社と改め今次大戦までの戦死者の霊を合祀、昭和32年8月20日社名を再び宮城県護国神社に復して現在に至っている。

注(3) 神武天皇の東征のとき、黄金色の鷄が飛来して天皇の弓にとまって戦勝に導いたという神話から、特に明治以後戦功のシンボルとされた。昭忠碑の金鷄は北方ロシアを睨視する姿勢をとっている。当時対露感情が刻々と激化しつつあったことから、そのように設計されたものである。この金鷄の部分は、昭和11年11月3日朝の強震のため翼が折れた。この時の修理の跡が残っている。

注(4) 前面のパネルには

『昭忠 元帥大勲位功二級彰仁親王書』、

背面のパネルには

『明治三十四年八月起工

明治三十五年七月竣工』の文字が浮出されている。

彰仁〔あきひと〕親王は、初め嘉彰親王といい、伏見宮邦家親王の第八王子で、軍事総裁として鳥羽・伏見の戦に従軍。明治3年東伏見宮家を創立、同15年小松宮彰仁親王と改称。後に参謀総長となる。弘化4年〔1847〕生、明治36年〔1903〕歿。

注(5) 「仙台市史」(明治41年刊)に次の記事がある。『昭忠標……標体の材料は花崗岩2,778才、煉瓦174,743枚、鉄材1,155貫等より成り金鷄の材料は銅2,222貫、鉛220貫より成る。工事を役すること5,071人、経費総計2万2千2百余円内金1万2千2百余円は石造標体に属し金9千円は鋳銅金鷄其他金属製部に属せり』

注(6) はやかわともひろ。天保15年〔1844〕7月24日小倉に生れた。幕末から明治維新にかけて、長崎・静岡に遊学、新来の学問を修めた。明治4年土木寮に出仕、明治11年野蒜築港所主任として一時在任したこともあった。明治13年三重県土木課長から宮城県土木課長に転じて来任した。土木行政の責任者として、当時策定された6大土木事業の完遂に全力を注い

だ。貞山堀開削もその一つで、「貞山堀」の命名者でもある。同19年愛媛県書記官に栄転辞令が下ったが、辞任して仙台にとどまり、早川組を創立した。彼は事業家としての手腕も抜群で、東北・北海道の大土木工事で早川組の参加しないものはなかったという。明治36年2月第4代の仙台市長に挙げられ、40年7月まで在職した。日露戦争の前後にわたる多難な市政を美事に処理し、大いに市勢を振興し、名市長の一人に数えられる。大正7年〔1918〕1月22日、75才で病歿するまで、きわめて多方面な社会・公共事業に寄与貢献した。新寺小路松音寺に葬る。

注(7) 名建築家。新潟県西蒲原郡角浜村の人。明治5年オーストラリア万国博覧会に大工棟梁として出張を命ぜられ、日本家屋を建築展示して外人の喝采を博した。この時彼は、外国建築を見学研究し、洋式建築の技術を修得して帰国した。明治15年、荒巻三居沢に紡績会社新設の際、建築工事の監督として来仙し、後宮城県庁に招かれ、建築主任技手として40年間在職した。明治の名建築として県指定の重要文化財となっている登米小学校校舎を始め、本県の大建築物は殆どその手に成ったものである。大正13年3月16日歿、81才、東十番丁天神下栄明寺に葬る。

「明治の建て物」（河北新報クリッピング、昭和38年）の登米小学校校舎の記事中に、山添進一郎とあるのは、山添喜三郎の誤りである。

資料 昭忠会書類

昭忠会雑書

仙台市史（明治41年刊）

明治の洋風建築－宮城県（小倉 強）

仙台の文化財続編（仙台市教育委員会、〔昭忠碑の項はこの回答に基いて記された。〕）

#### 44. ロシア捕虜収容に関する資料

**問** 私は、昨夏C社から「M収容所」と題する著書を出版いたしました。現在もひきつづき捕虜収容をテーマとして執筆中です。つきましては、日露戦争当時、御地に収容されたロシア捕虜について資料を御教示くださるようご依頼申し上げます。なお、今次大戦の連合軍捕虜についても資料がありましたら、併せてお願いいたします。

**答** 仙台市には、明治38年3月1日以降数回にわたって、松山収容所から2千余名のロシア軍捕虜が送られてきました。時の仙台市長早川智寛は、「捕虜に対しては人道的態度で接すべきこと」を、